

衰記だけが詳しく、他は相似た分量となっている。

# 八

承久の変は、この変の殆んど直後と言って宜い時点で『六代勝事記』に取り上げられ、この変を扱った軍記物、慈光寺本『承久記』もこの変から二十年以内に成立したと考えられていて、作品中の神祇関係の記事も『六代勝事記』と慈光寺本『承久記』とは通じる点があるように見えるので、本稿では、慈光寺本『承久記』を始点として半井本『保元物語』との関連に転じ、更に、『保元物語』と『平家物語』の関連を諸本に互って詳しく見て来た。慈光寺本『承久記』が頼朝による天下の平定に関心があるのに対して、『保元物語』は治承三年十一月の後白河法皇の幽閉後の戦乱、筆者の治承の乱への展開を意識しているらしいことはお分かりいただけたと思うが、所謂崇徳院説話の多様な在り方については実態を紹介するに止どまった。延慶本『平家物語』や『源平闘諍録』、四部合戦状本『平家物語』、更には、当道系諸本の崇徳院説話の含む問題についての考察は、将来を期すことにしたい。

(注一)『人文』平成九年八月。

(注二)本稿で採り上げた『保元物語』の主な諸本は、半井本・鎌倉本・金刀比羅宮本・京都大学附属図書館蔵本・古活字本の五本である。

(注三)寂超(藤原為経)によって承安二(一一五〇)年秋以降に書かれたかと考えられている。

(注四)承久二(一二三〇)年と保元元(一一五六)年の間、六十四年。

(注五)『吉記』承安四(一一七四)年三月十七日条。

(注六)元久元(一二〇四)年十一月二十六日条。

(注七)承元四(一二二〇)年十一月二十三日条。

(注八)赤松俊秀氏は元仁元(一二三四)年とする(日本古典文学大系『愚管抄』昭和四十二年一月)。

(注九)弓削繁氏『内閣文庫蔵六代勝事記』(昭和五十九年四月)の「解説」によった。

(注一〇)杉山次子氏「慈光寺本承久記成立私考(一)——四部合戦状本として——」(『軍記と語り物』昭和四十五年四月)。

(注一一)度数に微妙な混乱があるかと思われるが。

(注一二)軍記文学研究叢書6『平家物語主題・構想・表現』平成十年十月。

(注一三)『平家物語』の引用は延慶本によった(特に引用注記のないもの)。

(注一四)『保元物語』の引用で注記のないものは、半井本(第一類本)からの引用である。

(注一五)半井本『保元物語』には、これ以前の追号への言及もない(後述参照)。

(注一六)最近、金刀比羅宮本系を『平家物語』当道系諸本と共に語られた『保元物語』と見做す意見が多いように感じるのだが。

(注一七)武久豎氏は「平家物語、その変身(生成平家物語試論)——後白河院「伝奇」と「住吉大明神」を中心に——」(『軍記と語り物』平成七年三月)で、これを源頼朝の任征夷大將軍の九年の繰り上げに連なるものと捉えている。延慶本『平家物語』で捉えるとそのようであり、『平家物語』全体にとっても魅力的な視点であるが、筆者は、『平家物語』諸本の多様な在り方等から、未だそこまで踏み込めなかった。

(注一八)治承の合戦については、拙稿『治承物語』をめぐる試考(三)——最近の研究の動向を踏まえて——(『鹿児島県立短期大学紀要 人文・社会科学篇』平成八年(一一二二)で考察している。

(一九九八年九月二四日受理)

後白河法皇の鳥羽殿幽閉まで、『平家物語』の章段名で示すと、「清盛繁昌之事」から「法皇ヲ鳥羽ニ押籠奉ル事」まで（第一本から第二本まで）となる。古活字本『保元物語』が挙げていたのも、半井本『保元物語』の最後の事件、鳥羽殿幽閉である。

『平家物語』諸本では、長門本が半井本『保元物語』や古活字本『保元物語』に記されている様な或る人の夢を記した後、「されにや<sup>マヤ</sup>程なく入道相國れるならぬ心つきて 法皇をおしこめ なやまし奉り 物くるはしき事のみありて あく行かすを盡しける」と、同一の事件を、その変調の極まった時点としている。延慶本『平家物語』や『源平盛衰記』では、太政大臣師長以下四十余人を解官したことが「天广外道ノ入道ノ身ニ入替ニケルヨトソミヘケル」ということから、例の夢が記されている。従って、延慶本『平家物語』ではそのことが崇徳上皇達の御霊の齎したものに外ならないのであるが、『源平盛衰記』は、「入道猶腹ヲスヘカネタリト聞エケレバ 残ル人々モ 今イカナル事ヲキカンズラン ト肝魂ヲ消ス」とも記していて、「一院鳥羽籠居」への展開を示している。猶、『源平闘諍録』は「入道悪行随日勸<sup>ケル</sup>」となっていて、特に具体的に例示しているものはない。

右のように崇徳上皇の御霊が清盛邸に入りこんだという夢を記している『保元物語』・『平家物語』は、後白河法皇の鳥羽殿幽閉を（『平家物語』作品世界の）画期とする傾向がある。この時点は、慈光寺本『承久記』の「嫡子小松内大臣重盛公モ薨ジ給フ間 相国悪行 日比ニ超過スル」にも重なっている。この後、治承四年五月の以仁王・源三位頼政の脱出から源平の長い合戦が続いて行くことになる。筆者の考える治承の合戦は、この以仁王・源三位頼政の脱出に始まる合戦のことである。とすれば、『保元物語』の半井本や古活字本は、筆者の考える『治承物語』を意識していると言いうことも出来るのではないかと思うのである。<sup>（注一八）</sup>

崇徳上皇達の御霊が策動するという夢を記さない『保元物語』の鎌倉本と金刀比羅宮本では、五部の大乘経に祈誓を込めて「海底に入させ給ひける」（金刀比羅宮本）ということが記されている（古活字本にもある。京都大学附属図書館蔵本にはこれもない）。これらの諸本に見られる五部の大乘経を海に入れるという呪いは、壇ノ浦の海戦で安徳天皇を始めとする平家の一門の多くが入水して滅びることを暗示しているのではないと思われる。

崇徳上皇の追号が行われたのは、所謂鹿が谷事件の二月後の安元三（一一七七）年七月末、造廟が行われたのは、寿永三（一一八四）年四月の改元前日であった。

『保元物語』では、半井本を除く諸本が追号に言及している。時期を記すのは、金刀比羅宮本と鎌倉本が「治承の比」とし、古活字本は治承元年六月二十九日と一月ずれている。猶、京都大学附属図書館蔵本は、「御追号あるべしとて 大炊の御門河原にて 崇徳院とぞ申ける」と、造廟と混同している。造廟のことは、古活字本が日時を示さずに、追号とは別に記している。

『平家物語』諸本では、非当道系の諸本は史実通りに記しているが（四部合戦状本と南都本は欠巻）、当道系諸本は、中宮建礼門院の安産の為の赦免に結び付けて、追号を記している（中院本と太山寺本は「同七月」と、その月を示す）。従って、当道系諸本では治承二年のこととなっていて、後白河法皇の伝法灌頂よりも後に記されている。

造廟についても、南都本を除く非当道系諸本は『源平闘諍録』には無い（史実通りの日付けであるが、南都本や大方の当道系諸本は三日としている（東寺執行本は非当道系諸本に近い十三日、百二十句本と小城鍋島文庫本には日付けが無い）。記事は、追号では非当道系諸本と当道系諸本の間で繁簡の差が大であったが、造廟については、延慶本と源平盛

事の次に置かれているのが「法皇御灌頂事」の章段である。この章段では、治承二年二月に三井寺園城寺で公顯僧正から伝法灌頂を受ける予定であった後白河法皇は、延暦寺の大衆の抗議を受けて中止せざるを得なくなったが、四天王寺でその本意を遂げた旨が記されている。四天王寺での伝法灌頂の日は記されていないが、三井寺でのそれを中止して、程ほどの頃かと読める。後白河法皇の日吉山王信仰の記事は、治承三年十一月に鳥羽殿に幽閉された時、静憲法印が「君のとり分たのみまいらせさせ給ふ日吉山王七社 一乗しゆこの御ちかひたかふ事なくして かの法花八軸に立かゝりてこそ 君をまもりまいらせましますらめ」と言つて励ますところまで出て来ない。

次に、『源平盛衰記』は、「師長熱田社琵琶」「高博稲荷社琵琶」に続けて「教盛夢忠正為義」を置いている。この記事の後、特に「天台座主御修法」の記事はない。日吉山王に関するものは、長門本『平家物語』と同主旨の文が「静憲鳥羽殿参」にある。猶、教盛が例の夢を見たのは、治承元年七月の追号以後ではあるが、特に何時と定められている訳ではない。しかし、『源平盛衰記』の「讃岐院」(巻第八)の後でも「天台座主御修法」の記事はない。猶、「法皇三井灌頂」は、文治二年のこととしながらも、長門本『平家物語』と同じ箇所て記す(内容は、次の延慶本『平家物語』のものに近い)。

延慶本『平家物語』は、「入道卿相雲客四十余人解官事」で、「天广外道ノ入道ノ身ニ入替ニケルヨトソミヘケル」という文からこの夢に続いていた。「法皇ハ常ニ御精進ニテ御行ヒマナキ」ということであるが、この記事の近くで後白河上皇の精進振りを語るのは、やはり、同巻にある「法皇御灌頂事」である。後記のように、後白河法皇の仏道修業を「天广外道」の付け入る隙もないものとして描いているという点では、延慶本『平家物語』の「法皇御灌頂事」はよく出来ていると評せよう(但し、例の夢とは対応していない)。

崇徳上皇以下の御霊が押し入ろうとする夢を載せない当道系諸本(四部合戦状本『平家物語』は、『源平闘諍録』や長門本『平家物語』と同じように「讃岐院追号事」あたりにあったのではないかと思われる)を、半井本『保元物語』や古活字本『保元物語』に対応させてみるとどうであろうか。後白河法皇を仏道修業者として描くのは、やはり、「法王三井寺公顯僧正為御師範大日經蘇悉地經金剛頂經御傳受事」「於天王寺御灌頂事」(屋代本)(小城鍋島文庫本『平家物語』には無い)が一番である。『平家物語』の大方の諸本(覚一本・太山寺本・両足院本・大前神社本は治承元年九月)は、治承二年一月末の延暦寺の衆徒の蜂起に引き摺られるようにして、二月に衆徒の蜂起、それから程ほどの時期に伝法灌頂が行われたような書き振りである。伝法灌頂が延暦寺の衆徒の妨害後、程ほどの時期に行われたように記す点は、非当道系諸本と変わらない(但し、四部合戦状本『平家物語』『源平盛衰記』は文治年間とする。『源平闘諍録』・南都本『平家物語』は欠巻)。「平家物語」の大方の諸本が延暦寺衆徒の妨害の記事に続けて、四天王寺での伝法灌頂を記す理由は詳らかにし得ない(山門対寺門の対立の構図なども考えられて)。猶、延慶本『平家物語』と『源平盛衰記』は、後白河法皇が住吉大明神と言葉を交わす逸話を記して、延暦寺の衆徒の妨害と四天王寺での伝法灌頂を説明している。延慶本『平家物語』では、後白河法皇の仏道修行は住吉大明神と深い関わりを保っている様であるが、このこと以上には詳らかにし得ない。

## 七

前節では後白河法皇について記したので、ここでは清盛を中心に考えてみたい。

崇徳上皇達の御霊が入りこんでからの清盛の変調について、半井本『保元物語』が記していたのは、清盛の異例の出世から治承三年十一月の

古活字本は、右の崇徳上皇以下の霊が押し入った後清盛が過分になるというところまでを、不特定の「人の夢」として記す。そして、その後は、その清盛の霊を宥める為に、社を造り、霊を祀ったことに続ける。<sup>(注一五)</sup>一方、この記事と前後して、「崇徳院の御たゝり」として、

同三年十一月十四日に 清盛 朝家をうらみ奉り 太上天皇を鳥羽の離宮にをしこめ奉り 太政大臣已下四十三人の官職をとゞめ 関白殿を太宰権帥にうつしまいらす

という治承三年の清盛による政変も記されている。

右の半井本『保元物語』では蓮如が、古活字本『保元物語』では特定されていない人が見たとされる夢と殆ど同じものが、延慶本『平家物語』・長門本『平家物語』・『源平盛衰記』・『源平闘諍録』に見られる。『源平盛衰記』だけは平中納言教盛の夢としているが、他三本は、古活字本『保元物語』と同じく不特定の「人ノ夢」である。御霊の一行に延慶本『平家物語』は悪左府頼長を加えるが、子息太政大臣師長が流罪になったことを、その一方でいぶかしんでいる（これは、源中納言雅頼の侍の夢の疑問に近い）。『源平盛衰記』は、一行の山伏装束や「木幡山ノ峠」で評定した事等、具体化の傾向が強い。『源平盛衰記』は、外に、法皇の御所に入れなかった理由を「当時天台座主御修法」としているが、これは、長門本『平家物語』が「當時ことに御祈きひしくて 日よし山王の御宿直かたく候へは」とするのと、何か関係でもあるのであろうか。又、『源平闘諍録』は、一行が押し入ろうとしたのを「内裏」としている。

右で、長門本『平家物語』が「日よし山王」を出したのは、「法皇鳥羽殿御幸事」で静憲法印が「君のとり分たのみまいらせさせ給ふ日吉山王七社 一乗しゆこの御ちかひたかふ事なくして かの法花八軸に立かりてこそ 君をまもりまいらせましますらめ」と言って励ますのに対応させたものに違いない。『源平盛衰記』のものは、これを具象化させたもののように見える（静憲法印の励ましもある）が、『源平盛衰記』では、

この記事の少し先に「一院鳥羽籠居」の記事が出て来るので、ちくはぐな印象を受ける。

『保元物語』の半井本や古活字本は、前記のように崇徳上皇達の御霊が清盛邸に押し入るといふ夢物語を記すのであるが、鎌倉本や金刀比羅宮本にはこの夢は記されていない。『平家物語』でも当道系諸本には、この夢物語は記されていない。

『保元物語』と『平家物語』の諸本間のこの対応は、『保元物語』の語られた諸本を示すことになってはいはないかと思うが、如何であろうか。<sup>(注一六)</sup>

## 六

前節で記した夢物語にもつとこだわってみたい。

崇徳上皇達の御霊が入ろうとして果たし得なかった後白河法皇の御所は、『保元物語』の半井本や古活字本では「不動明王 大威徳」が守護していた。『平家物語』諸本では、『源平闘諍録』の「八大明王奉<sup>ル</sup>守護」と記しているのが、これに近からう。これに対して、長門本『平家物語』や『源平盛衰記』は前述のように天台宗的であった。又、延慶本『平家物語』は、「御行ヒマナク候」と特にこれという特色のない書き方である（但し、後記参照）。

歴史資料によると、後白河上皇が日吉社に初めて御幸したのが永暦元（一一六〇）年三月、出家が嘉応元（一一六九）年六月、延暦寺での受戒が安元二（一一七六）年四月、伝法灌頂が文治三（一一八七）年八月、四天王寺で、ということである。

さて、『平家物語』諸本は、後白河法皇の仏道精進をどう描いているであろうか。

長門本『平家物語』は、「成親死去事」の後に「讃岐院御事」を置き、この章段の中で例の夢を記していたが、この崇徳上皇に関する一連の記

學ハソノカミ同ジ國ニナガサレテアリケル時 アサタニユキアイテ 佛法ヲ信ズベキヤウ 王法ヲオモクマモリタマツルベキヤウナド云聞セケリ」と記している。『平家物語』において高野山真言宗に関わる記事が、「驕ル心モ猛キ事モ」「心モ詞モ及ハレネ」とされる清盛とは別の像を結んでいることを、筆者は別稿『平家物語』の物語空間 高野・熊野<sup>(注二)</sup>で指摘した。文覚上人は、この高野山真言宗と深い関わりを保つ人でもあった。平重盛を「小國ニ相應セヌ人」と評価し、源頼朝の為には後白河法皇の院宣を貰つて来て、旗揚げさせ、神護寺を始め、空海ゆかりの大寺院の復興事業に尽力した文覚上人は、『平家物語』の作品世界の要に位置すると評し得よう。

ところで、『平家物語』の「文學被流罪事」<sup>付文学死去事 隠岐院事</sup>「源平盛衰記」には無い。『源平闘諍録』、平松家本『平家物語』は欠巻)によると、後鳥

羽上皇が義時追討の兵を挙げ、逆に敗れて、隠岐島に流されたのは、「文学力盡」の仕業ということになっている(『平家物語』の四部合戦状本と長門本はこのことに言及しない。延慶本と南都本や当道系諸本では記事に繁簡の差がある)。慈光寺本『承久記』には文覚は登場しないが、『平家物語』の文覚譚は、承久の変後にまで及んでいるのである。

## 五

慈光寺本『承久記』には、保元の乱が、

崩御ノ上ハ 御位ヲバ崇徳院へ還被申テ重祚アルカ 御嫡孫重仁ノ親王ヲ御位ニ即申サル、カト思食処ニ 思ノ外ニ 弟四ノ宮後白河ノ院へ御位ヲマイラセラレケレバ 崇徳院ハ無本意思食ケレドモ法皇ノ御計ヒナレバ 力不及 御堪忍アル処ニ 無程法皇モ崩御ナル間 崇徳院 ヤガテ御中陰ノ中ヨリ御謀叛ヲ被興 主上ト上皇ト御合戦アリ

と記されている。慈光寺本『承久記』は、「国王兵乱」を記し挙げるとい

う立場に立っている。崇徳上皇の立場を軸にして纏めている。ところで、この「主上ト上皇ト御合戦」という捉え方は、「主上 上皇ノ国ヲ論ジ給」こと(表現には異同がある)として、『保元物語』諸本で悪左府頼長が使っているのである。

しかし、保元の乱の捉え方は、この「主上ト上皇ト御合戦」だけではない。『六代勝事記』は「去保元〓年 左大臣<sup>頼長</sup> 鳥悪のはかりことをめくらしめて 狼戾の群をなして 天下をみたり 洛中をあやうからしむ」と、悪左府頼長の企みとしているのである。

更に、『平家物語』諸本の大方は、「保元〓年左大臣代ヲ乱給シ時」と『六代勝事記』方の表現を採っているのであるが、当道系諸本のうち屋代本・小城本・中院本・城方本は「主上上皇御代ヲ諍ハセ給シ時」(屋代本)と、慈光寺本『承久記』等方の表現を採っていた。『平家物語』諸本の捉え方が分かれるのは非常に興味深い。前者が読み本、後者が語り本の表現ということになるのか、未だ明確な判定はしかねている。

ところで、『保元物語』の中には、『平家物語』の世界である清盛の「驕ル心」「猛キ事」に関連付けて行くものがある。最も詳しいのは、半井本『保元物語』の次の箇所である。

蓮如ガ夢ニ見タリケルハ 讃岐院ノ四方輿ニメシテ 為義父子六人先陣ニテ 平家忠正父子五人家弘父子四人後陣ニテ 院ノ御所ヘ打入ラントスルガ 追帰レテ 為義御輿ノ御前ニ馬ヨリ下テ 院ノ御所ニハ 不動明王 大威徳ノ禦力セ給候間 エ参リ候ズ ト申ケレバ サラバ清盛ガ許ヘ昇入ヨ ト被仰ケレバ 無相違打入テ 院ヲモ入進セツト見タリケレバ 其後 清盛 次第ニ過分ニナリ 太政大臣ニ至リ 子息所従ニ至マデ 朝恩肩ヲ并ル人ゾ無 ヲゴレル余ニ 院ノキリ人中御門ノ新大納言成親卿父子ヲ流シ失ヒ 西光父子ガ首ヲ切り 撰録臣ヲ備前国ヘ移奉リ 終ハ院ヲ鳥羽殿ヘ押籠進スルモ 只讃岐院ノ御崇トゾ申ケル

慈光寺本『承久記』の安德天皇「兵乱」は

外戚入道大相国 一向天下ヲ執行セシ程ニ 源氏 一向頭ヲ出ス輩  
ナシ 雖然 相国ノ運命モ漸末ニ成シカバ 嫡子小松内大臣重盛公  
モ薨ジ給フ間 相国悪行 日比ニ超過スル間 源氏又依院宣 前右  
兵衛佐頼朝ハ坂東ヨリ打テ上リ 木曾二郎義仲北国ヨリ責上テ 無  
程平家ハ没落ス

などと記されている。この記事の特徴が、「源氏又依院宣」と後白河法皇の院宣による蹶起とすることや、「相国ノ運命モ漸末ニ成シカバ 嫡子小松内大臣重盛公モ薨ジ給フ間 相国悪行 日來ニ超過スル」と文覚上人の口吻を想わせる点（という以上に、『平家物語』の筋に近いのかも知れない）にあることは、拙稿『「治承物語」をめぐる試考（四）——『平家物語』への道など——』に記した通りである。

この中、後白河法皇の院宣による蹶起の問題は、『愚管抄』では、

又光能卿院ノ御氣色ヲミテ 文覺トテアマリニ高雄ノ事ス、メスゴ  
シテ伊豆ニ流サレタル上人アリキ ソレシテ云ヤリタル旨モ有ケル  
トカヤ 但コレハヒガ事ナリ 文覺 上覺 千覺トテグシテアルヒ  
ジリ流サレタリケル中 四年同ジ伊豆國ニテ朝夕ニ頼朝ニ馴タリケ  
ル ソノ文覺 サカシキ事ドモヲ 仰モナケレドモ 上下ノ御ノ内  
ヲサグリツ、イ、イタリケルナリ

と、明確に文覺の狂言としていた。これに対して、『六代勝事記』が、

伊豆國の流人前右兵衛権佐源朝臣頼朝 右馬頭 義朝男也 者清和の後胤 右馬  
頭義朝 贈大府 の男也 甲斐信濃両国の源氏等をかたらひて 謀叛をた  
くむ

と、院宣が高倉宮以仁王の令旨で蹶起したかの問題に、ここで直接触れていないのも、前稿で指摘した通りである。しかし、改めて『六代勝事記』を読み直してみると、以仁王の令旨で蹶起したということは、次第に言い難くなっていたのではないかと考えられる。と言うのは、以仁王

の蹶起は、『六代勝事記』では、

同五月廿六日に入道源三位頼政卿高倉宮に後従して 南都に零落の  
事あり

と甚だ影が薄い。これに対して後白河法皇は、所謂鹿が谷の隠謀事件に  
おいて、

後白河法皇 高倉 安元年中に大納言成親卿 西光入道等におほせて 謀叛  
をめくらし給に

と、『愚管抄』の記述より大きく踏み出して、主導者として描き出されて  
いる。従って、前記の頼朝の「謀叛」も、この『六代勝事記』の文の流れ  
で行くと、頼朝個人の思わくから蹶起したか、後白河法皇の命を受け  
て立ったか（「謀叛」の語が所謂鹿が谷事件の場合と共通している）のい  
ずれかで、以仁王の令旨には結び付難くなっていると思われるのであ  
る。

慈光寺本『承久記』は、このような流れの上で纏められたものではな  
らうか。

慈光寺本『承久記』の安德天皇「兵乱」を読むと、後白河上皇の院宣  
による源氏の蹶起が相当地に流布し、源平合戦のあらましも簡明に捉えら  
れていた状況が浮かんで来る。

#### 四

『六代勝事記』から慈光寺本『承久記』の成立の頃を、『平家物語』の  
成立を視野に入れながら前節で想い巡らしてみたのであるが、『六代勝  
事記』・慈光寺本『承久記』と『平家物語』の間には、作品上に大きな性  
格の違いがある。それは、神仏関係の記事、唱導的文章の極端な多寡の  
問題である。

この問題を考えて行つた時、『平家物語』の成立に深く関係すると思わ  
れるのが文覚上人である。文覚上人について、慈円は『愚管抄』で「文

清範只一人 女房兩三云々 則義茂法師參カハリテ清範歸京云々  
土御門院并新院 六條宮 冷泉宮 皆被行流刑給云々 新院同月廿  
一日佐渡國 冷泉宮同廿五日備前國小島 六條宮同廿四日但馬國  
土御門院ハ其比スギテ 同年閏十月土佐國へ又被流刑給 其後同四  
年四月改元 五月比阿波國へウツラセ給フ由聞ユ 三院 兩宮皆遠  
國ニ流サレ給ヘドモ ウルハシキ儀ハナシトゾ世ニ沙汰シケル也  
と記している。見た通り、これは三院・二宮の乱後の処置の記事だけで、  
乱の経緯は全く記されていない。

『愚管抄』の第二次追記がなされる直前、貞応二(一二三三)年五月か  
ら翌三年十一月までの間に記されたと見られているのが『六代勝事記』  
である。

『六代勝事記』の序に相当する部分によると、「先生の徳失をのこし  
をのつから後生の官学をすゝめむ」為に「普天かきくもりし ゆふたち  
の神なりにおとろきて 其事のわすれざるはし／＼はかりをかきあつ  
め」たとのことであるが、半分弱を承久の変の経緯の記述に充てている。  
これらのことから見ると、承久の変は、変終結後僅か数年で、朝廷方の  
政治に深い関心を寄せる人物達によって取り上げられるようになったと  
見られる。

『六代勝事記』は、承久の変の敗因を、

太上天皇威徳自在の樂にほこりて 万方の撫育をわすれ給ひ 又近  
臣寵女のいさめつよくして 四海の清濁をわかさる

点に求めているのであるが、『六代勝事記』の中で、このことが具体的に  
形象化されているとはいえない。承久の変の始まりも、

五月十五日に太上天皇天寶のむかしにひとしく兵をめして 洛陽の  
守護光季を討せられ 追討使をわかちつかはすにおよひて 二品禪  
尼

と、直ちに政子の言葉に続いて行き、概説といった風である(当たり障

りがあつた為かも知れない)。

『承久記』の最古態本とされている慈光寺本の成立は、寛喜二(一二三三)  
〇)年から仁治元(一二四〇)年の間と考証されている。それは、承久  
の変後十年から二十年弱のことになる。前記『今昔物語集』<sup>(注一〇)</sup>が後三年の  
役を取り上げるのよりも一段と新しく、現代の戦役の記録と言つて宜か  
ろう。このように早く戦記が纏められたのは、やはり『愚管抄』や『六  
代勝事記』が取り上げていた様に、京都の宮廷政治家に与えた衝撃の甚  
だしさに依るのではなからうか。一方、それが独立した長編軍記物とし  
て纏められた契機はよくは分からない。或いは、『六代勝事記』の記事を  
短く纏めるといった方向では満足出来ない、細部への関心といったもの  
が生じたのであろうか(猶、後述参照)。

### 三

慈光寺本『承久記』は、承久の変を「太上天皇ト右京権大夫義時ト御  
合戦」、「国王兵乱」<sup>(注一一)</sup>「十二ヶ度」の最も新しいものとして具体的に描いて  
いる。承久の変に入る前に安德天皇・崇徳上皇の兵乱が挙げられている  
が、その前は「聖武天皇ト弟ノ親王ト合戦」という四百余年も昔の合戦  
になっている。『愚管抄』は「日本國ハ大友王子 安康天王ナンドノ世ノ  
コトハ 日記モナニモ人サタセズ 大寶以後トイ、テソノ、チノコト  
又コノ平ノ京ニナリテノ、チヲコソサタスルコトニテアル」と記してい  
たが、そうすると、慈光寺本『承久記』の挙げる「国王兵乱」の三分の  
二は、取り沙汰にもならない話柄だということになる。慈光寺本『承久  
記』は、歴史の闇の中から「国王兵乱」の逸話を引き摺り出し、その延  
長線上に承久の変を描いて行くのである。筆者は、前節で、独立した長  
編軍記物として纏められた契機はよく分からないと述べたが、説話類聚  
的体裁を設けることによって、承久の変を語る長編軍記物が成立してい  
るところに、その仕掛があるのかも知れない。

# 慈光寺本『承久記』、『保元物語』諸本、 『平家物語』諸本の関連などを追って

橋口晋作

著者は、先に『治承物語』をめぐる試考(四)——『平家物語』への道など<sup>(注一)</sup>で、第一類本『平治物語』と『平家物語』の成立などについていささか想像を逞しくしたのであったが、本稿では、慈光寺本『承久記』『保元物語』の主な諸本、<sup>(注二)</sup>『平家物語』諸本の関連などについて、同様の姿勢で、具体的に調べてみたい。

## 一

慈円は、『愚管抄』巻第三の冒頭部で、

保元ノ亂イデキテノチノコトモ マタ世繼ガモノガタリト申モノモ  
カキツギタル人ナシ 少々アリトカヤウケタマハレドモ イマダエ  
ミ侍ラズ ソレハミナタゞヨキ事ヲノミシルサントテ侍レバ 保元  
以後ノコトハミナ亂世ニテ侍レバ ワロキ事ニテノミアランズルヲ  
ハバカリテ 人モ申ヲカヌニヤトロロカニ覺テ

と述べている。文中で「少々アリトカヤウケタマハレドモ」と述べているように、既に『今鏡』は成立していたと考えられるが、<sup>(注三)</sup>「世ノウツリカハリオトロヘクダルコトハリ」などを論じようとしている慈円には、「保元以後」の「亂世」を真に辿った歴史書とは考えられなかったであろう。

承久の変を諫止しようという一方の意図や慈円の著作物を集める能力等を厳密に考えれば、「亂世」史の試みが外に無かったとは言いい切れないが、慈円の語気からすると、武士の時代を主対象として取り上げた歴史

書は未だ無かったように見える。

「保元ノ亂イデキテノチノコト」を記しているというものの中に所謂軍記物を入れることが出来るかどうかは、どうなのであろうか。保安元(一一二〇)年以降に成立したと見られている『今昔物語集』には、後三年の役の合戦物語を纏めようとした跡がある(「源義家朝臣討清原武衡等語」という標題のこと)。『今昔物語集』の成立時期からは三十年以上前の合戦ということになるが、<sup>(注四)</sup>『愚管抄』と保元の乱の時間差に比べると半分程度である。

『今昔物語集』に『将門記』『陸奥話記』が短編化して纏められているように、院政期に独立した長編軍記物は書かれなかったかと思われる。又、『今昔物語集』以外の説話集は、当代の合戦まで物語化しようという企てにも乏しいようである。

後白河法皇の時代に「後三年絵」が描かれたことが知られているが、<sup>(注五)</sup>これは九十年も昔の合戦である。『吾妻鏡』に出て来るものも将門の乱<sup>(注六)</sup>であり、前九年の役であって、<sup>(注七)</sup>当代の合戦に取材したものは、十三世紀末にならないと出て来ないようである(『蒙古襲来絵詞』であるが、性格が相当に異なる)。

右のことから、「亂世」を対象として歴史を辿った歴史書は言うまでもなく、当代軍記物も、『愚管抄』に始まると見て置きたい。

## 二

『愚管抄』によって承久の変を諫止しようと試みたにも拘らず、後鳥羽上皇は、北条義時追討の命を発し、逆に鎌倉幕府軍に敗れてしまった。この承久の変のことを、『愚管抄』の第二次追記に、<sup>(注八)</sup>慈円は、

今年天下有内亂 コレニヨテ 俄ニ主上執政臣改易 世人迷惑云々  
一院遠流セラレ給 隱岐國 七月八日於鳥羽殿御出家 十三日御下  
向云々 但ウルハシキヤウハナクテ令首途給云々 御共ニハ俄入道